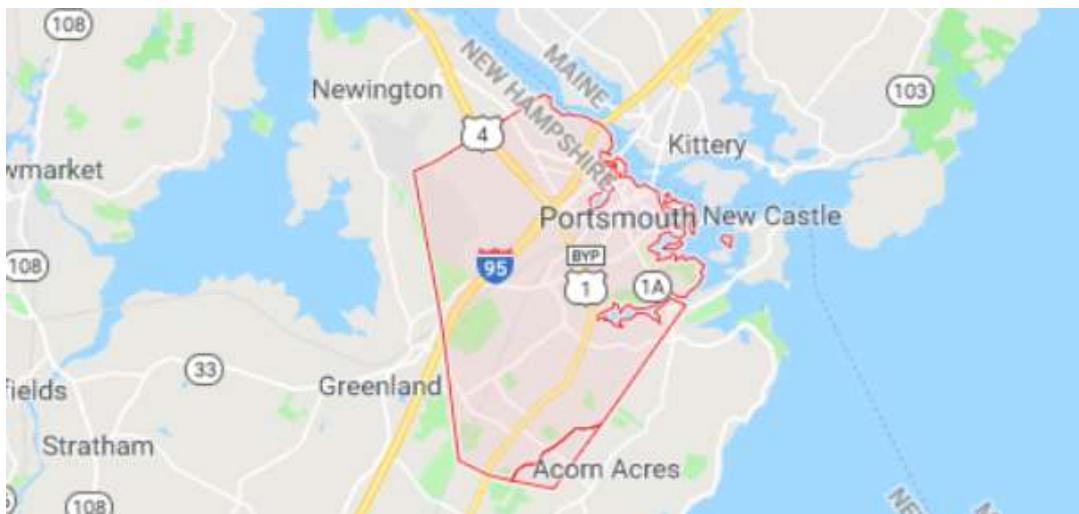
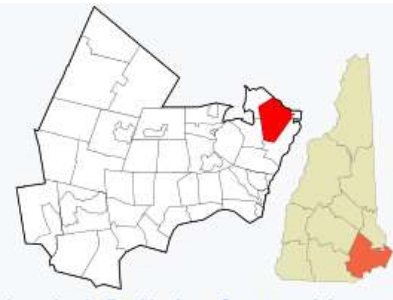


ニューイングランド便り 2019年

ニューハンプシャー州ポーツマス市

沼倉研史

今年も恒例により米国ニューイングランド地方の町をご紹介します。今回はニューハンプシャー州のポーツマス (Portsmouth) 市です。ポーツマスという名前を聞いて、日本の皆さんは「アレツ」と思ったのではないのでしょうか。そうです。日本の高校の歴史教科書にでてくる、日露戦争の講和交渉が行われ、いわゆるポーツマス条約が締結されたのは、この町でのことなのです。そのようなわけで、ポーツマスという小さな町は、日本人にとって、ニューイングランドでは、ボストンに次ぐ有名な地名になっています。



ニューハンプシャー州は南北に長く、一般には内陸の州と思われがちですが、実は南東部がわずかながら大西洋に面しています。その北側の部分がロックンガム郡

で、メイン州に接しています。ふたつの州はピスカタカ川で分けられていますが、その南側に位置しているのがポーツマスなのです。上の地図が示すように、厳密に言えば、ポーツマスは大西洋に面しているわけではありません。ただ、幅の広いピスカタカ川の河口に近いところに位置しているので、入江のようになっています。天然の良港となっています。このため、貿易の中継地として発展してきました。ニューハンプシャーの内陸では、紡績業、製紙業、製靴業などが大きくなりましたが、その材料や製品を輸送するための基地になったわけです。また、ピスカタカ川の中州に海軍の兵器廠が作られたことも、港町としての活力を増したのでしょう。ただ、兵器廠のある中州は、行政上メイン州になります。1905年の日露和平交渉も、この海軍施設で行われました。日本全権の小村寿太郎は、ポーツマス市内のホテルを拠点にして、交渉会場の兵器廠に船で通ったとのこと。このころの人口は、1万人をわずかに越える程度だったとのことですので、ニューイングランドの典型的な田舎町だったのでしょう。世界史に名前を残す重要な場所が、このような目立たないところだということは意外な印象を受けます。



川の中州にある海軍の兵器廠（メイン州）、ここで日露講和会議が行われた。現在では手前の川岸にたくさんのレジャーボートが係留されている。

外部の人間にとって、交通の便はあまり良くありません。一応、国際空港がありますが、ポーツマスへの直行便を飛ばしている空港は多くはありません。もっとも使いやすいのは、ボストンからの直行バスです。これも本数は多くないようです。地元の人々は、もっぱら車を使います。ボストンまでは、高速道路95号線を使えば、

1時間強で着きますので、完全に通勤可能範囲です。このため、ポーツマスとその近郊の町はボストンで働くビジネスマンのベッドタウンとしての性格が強くなっています。ただし、朝晩の高速道路の渋滞はかなりなものようです。私の住んでいるマサチューセッツ州 Haverhill 市からは30～40分です。

川や湖へのアクセスが良いことは、水遊びが好きなアメリカ人にとっては大きな魅力です。川岸に家を持てれば、自分の家の庭に栈橋を設け、自宅からクルーザーで外洋に出て、釣りを楽しむといったことが夢ではなくなります。ニューヨークやボストン近郊であれば、5～10億円はする川辺の中型家屋が、このあたりならば土地付きで数千万円で購入できるのですから。

ポーツマスに移民の入植が始まったのは1623年とのことです。英国から清教徒がプリモスに到着してから、まもなくのことになります。面積は43.6平方キロメートルで、東京都の江東区よりも少し大きい程度です。ここに21233人の人々が住んでいます。(2010年人口センサスのデータ)人口の上では、決して大きな町とはいえません。しかしながら、ダウントウンなどは、Haverhill (人口7万人)よりも大きいくらいで、落ち着いた感じのレンガ作りの建物が並んでいます。ダウントウンの建物は、ほとんど19世紀のままです。なんでも19世紀初頭にダウントウンで大火があり、それ以降耐火性のレンガ造りの建物が多くなったとのことです。当時としては、かなり広めの道路を整備したつもりだったのですが、今となっては不十分で、町の中は一方通行のサインだらけです。



一方通行が多いダウントウン、市内巡回の観光バス

ダウントウンはほぼレンガ作りのビルで、4～6階建てで統一されています。1階には商店やレストランが入り、2階以上はオフィスやアパートとして使われています。またビルには必ず地下室が付いていて、生活空間の一部になっています。



典型的なオフィスビル、1階は購買意欲をそそる個性的な商店が入る。



高層ビルといっても、5、6階建てで、1階にはしゃれたカフェも。



フリーメイソンのマソニックテンプル、大きな木造のオフィスビル

レンガ造りのビルはいずれも19世紀の建設で、とても良く保全されています。内装も、昔のものをできるだけ活かすようにしているようです。一方で最新の空調設備、手洗い設備、IT機器などが設置されていて、現代的なオフィス、生活環境が整っています。ここでは、古い建物が歴史遺産として保存されているのではなく、

現役の生活環境として使われています。企業にとっては、このようなビルにオフィスを持つことは、ある種のステータスシンボルになっているといえるでしょう。ただ、これらの古いビルにはエレベータは設置されていないことが多く、階段も急なので、私のように歩くのが不自由な身体障害者は、入るのに躊躇してしまいます。昔の建物は天井が高く、1階あたりの高さが大きいので、3階建のビルが、現代の4階建くらいの高さがあります。

ポーツマスのダウンタウンの中には、かなり本格的な和食レストランが2軒もあります。ニューイングランドでも和食レストランは増えていますが、多くは似非者で、味は似て非なるものがほとんどです。和食レストランの質でその町の文化レベルを計れるとはいえないかもしれませんが、ニューイングランドの人口2万人の町としてはかなりのものといえるでしょう。



瀟洒な木造の弁護士事務所

美しいレンガ色が映えるオフィスビル

ダウンタウンを外れると、一戸建ての建物が余裕を持って並んでいます。多くは木造ですが、一部レンガ造りの建物も散見されます。いずれも、庭はよく手入れされていて、散歩するのが楽しくなるような景色が続きます。木造家屋は、ほとんどがニューイングランド・コロニアルスタイルという形式で、多くは19世紀の建築です。郊外に出るほど、新築の建物が増えますが（コロニアルスタイルは守っています。）、それでも20世紀前半で、全体の景観はあまり変わりません。



ちょっと珍しい形のコロニアルスタイルの大型家屋

ポーツマス市の北側は、ピスカタカ川を挟んでメイン州のキッターリー市に面していて、間に何本かの大きな橋が架かっています。そのうち、少なくともふたつは開閉式の橋になっています。これは、大型の貨物船のためではなく、高いマストを持ったレジャーヨットのためなのです。一旦橋が開くと、10～15分ぐらいは道路の方の交通がストップしてしまいます。これが日本の大都市だったら大ブーイングでしょうが、こちらではのんびりとしたものです。むしろ、このような機会に巡り会ったことを、絶好のチャンスとして車を降り、めったに見られない絶景を楽しむのです。



メイン州へ向かう道路に架けられた開閉式の橋、前方のタワーが橋を開く仕組みになっている。

ポーツマスにも、古いキリスト教会がたくさんあります。特にこの地域は、歴史的な経緯から、英国系の会派の教会が多いようです。ニューイングランドへの移民が、教会に導かれ、精神的に支えられていたことがうかがえます。その活動は現在まで生きています。



大きな聖公会の教会

古いカトリック教会の内部

ポーツマスは歴史がある割には、博物館や美術館はあまりありません。街中には、日露講和会議の痕跡はほとんどみあたりません。高等学校に隣接する中央図書館はかなり大きな施設ですが、建物は最近のものです。ただ、ここには特別コレクション室があり、日露講和会議の一次史料がたくさん保存されています。



ポーツマスの中央図書館、右のドアが特別史料コレクション室への入口

博物館ということでユニークな存在なのが USS アルバコア・ミュージアムです。これは米国海軍で使われた潜水艦 *Albacore* の現物が展示されています。USS *Albacore* は1953年に進水したディーゼルエンジンを動力源とした潜水艦ですが、艦体の形状が、いわゆるティアドロップ状（涙滴型）の最初の実験艦として建造されました。長さ62メートル、排水量1540トン、乗員54名の同艦は、様々

な新しい試みがなされたが故に、色々な技術的なトラブルも少なくなく。1972年には除籍となっています。本来ならば解体されてスクラップになるところが、ある篤志家（女性）の申し出により、専用のミュージアムを作り、永久保存されることになったのだそうです。アルバコア以降に建造された米国の原子力推進の潜水艦は、ほとんどが水中速度の大きい涙滴型になっています。

現在では入場料を払えば、だれでも自由に艦内を見学することができます。このようなところが、世界最大の軍事力を誇るアメリカ合衆国がなせる技といえるでしょう。そのようなわけで、米国は模範的な平和国家とはとてもいえないわけです。



郊外の大きな窪みに設置された実験潜水艦アルバコア

潜水艦アルバコアの中に入ってみると、艦内は想像を絶する狭さです。機器の電子化、小型化がまだできていなかった当時としては、全ての機器が大振りです。それだけ乗組員の居住空間が圧迫されることとなります。機械式のジャイロスコープはかなりのスペースを占めていますが、乗組員が寝起きするベッドの狭さは格別で、日本のカプセルホテルが豪華に感じるほどです。このような狭い空間に押し込められて何週間も航海を続ければ、精神に異常をきたすのもうなずけます。戦争というものが、いかに非人間的なものであるかを体感する場所として、アルバコア・ミュ

ージウムは価値があります。



潜水艦の動力室、乗組員がちょっと休憩できるようなベンチもない

日本人にとっては親しみのあるニューハンプシャー州ポーツマス市のツアーは
いかがだったでしょうか。歴史的に有名な地名の割には、これといった特徴のない
田舎町だったかもしれません。ニューイングランド地方というのは、このような古
い小さな町がたくさんあることがひとつの特徴といえるでしょう。